特集 Feature articles

職場の音楽活動

社員は和太鼓必修！ ユニークな不動産会社

オレンジボード
小林晶子

和太鼓との出会い

テンツクテケテンテレツクツ、テケテンステンコテレツクツ。

仕事が一段落した七時すぎ、接客用のホールには締め太鼓が並べられる。地元に長く伝わるお囃子を教えて下さるために、近所の魚屋、八百屋、床屋、パン屋のご主人が次々に集まってくる。今から二十年ほど前のことである。

当社は地域密着で、「顔の見える不動産屋さん」をモットーに掲げ、商店街の催しに積極的に参加していた。そんな中で偶然持ち上がった話から、社長の号令のもと、毎夜毎夜の「西荻囃子」の特訓が始まったのだ。

譜があるわけではなく、皆、口写し（唱歌）である。笛に合わせて調子、間、息を合わせ、ずいぶん昔より人から人へと伝えられてきたのであろう。小気味よいリズムに、あれよあれよという間に魅せられた。

白髪交じりのおじさんたちは、皆、幼少時代からの遊び仲間だったり、先輩後輩だったりする。稽古の後はいつも、昔話に花が咲き、宴会が始まるのだった。これが、会社と和太鼓、そして私と和太鼓との最初の出会いである。

ひと通り曲を覚えて、秋祭りの神社の神楽殿に上げていただけるようにもなり、ますます和太鼓への興味が増してきた頃、東京・国立劇場において「日本の太鼓」という公演があることを知る。社長をはじめ社員全員で観に行った。

今まで見たこともない大太鼓、聞いたこともない大音響。組太鼓の奏でる曲は、まるでオーケストラのようで新鮮だった。巧みな撥さばきとほとばしる汗、体全体を震わす躍動感。とにかく皆、心を揺さぶられ、興奮した。

小学校の音楽室や盆踊りでしか大きな太鼓を見たことがなかった私は、ただただ驚いた。太鼓でこのような表現ができるんだというこの日の感動が縁となり、プロの太鼓事務所の門を叩くことになるのである。

入門

毎週木曜日、七時の閉店後、社長以下全員が、神田まで太鼓の稽古に通う日々が始まった。八時からの一時間、ひたすら打ち込み汗を流す。

はじめは、太鼓に向き合って足を広げて構えるだけでも重労働。足がガクガクと震え、手のマメは潰れて撥に血が滲んだ。普段使い慣れない左手が自分の思い通りに動かない。二の腕がパンパンに張った。

幼児が叩いても音は出る太鼓であるが、気を入れて芯を打ち抜くとなると簡単にはいかない。納得する音が出ない。リズムを刻む、拍子を合わせる、すべてにおいて奥の深さを痛感した。

それだからこそ、習うことが楽しかった。滝のような汗の後の爽快感がたまらなかった。そしてそこには、会社での役職も関係なく、

練習風景

先輩後輩もない世界があった。太鼓の前では、共に習い、共に打ち込む門下生であった。

太鼓チーム誕生

少しずつ手がまわるようになり、音も出せるようになって来た頃、バブル経済とも呼ばれる好景気に突入する。不動産の取引が異常なほどに活発になり、高額取引が相次いで行われた。本業での収入は、同業者がやったように不動産の購入には当てられず、すべて太鼓のために使われた。たくさんの太鼓は、この時に揃えることができた。

石川県松任市（現・白山市）にある浅野太鼓店へ社員全員で出かけて行き、和太鼓が作られる工程を見学させていただいたことがある。

何百年も前から生きてきた欅を丹念に削る。節が多かったり、ひび割れてしまったりで、使い物にならないものも出てくるとのこと。皮は、太鼓用に大きく育てられたメス牛のものを使う。ちょっとした傷でも、なめしているうちに破れてしまう原因になるそうだ。生き物相手の職人芸、五百年以上も続く伝統芸は素晴らしかった。

「音は正直、真っ直ぐな心を映す」

と言われた浅野さんの言葉が今でも心に残る。

三尺五寸の平太鼓、三尺三寸の桶胴太鼓、二尺五寸、一尺五寸、一尺四寸の長胴太鼓、締め太鼓、これらは会社の財産である。

社内で本格的な練習ができるようにと、防音設備を整えた練習場が新社屋に造られ、週一回だった練習は定休日以外の毎日になり、めきめきと腕を上げた私たちの組太鼓チームの誕生となるのである。

太鼓業

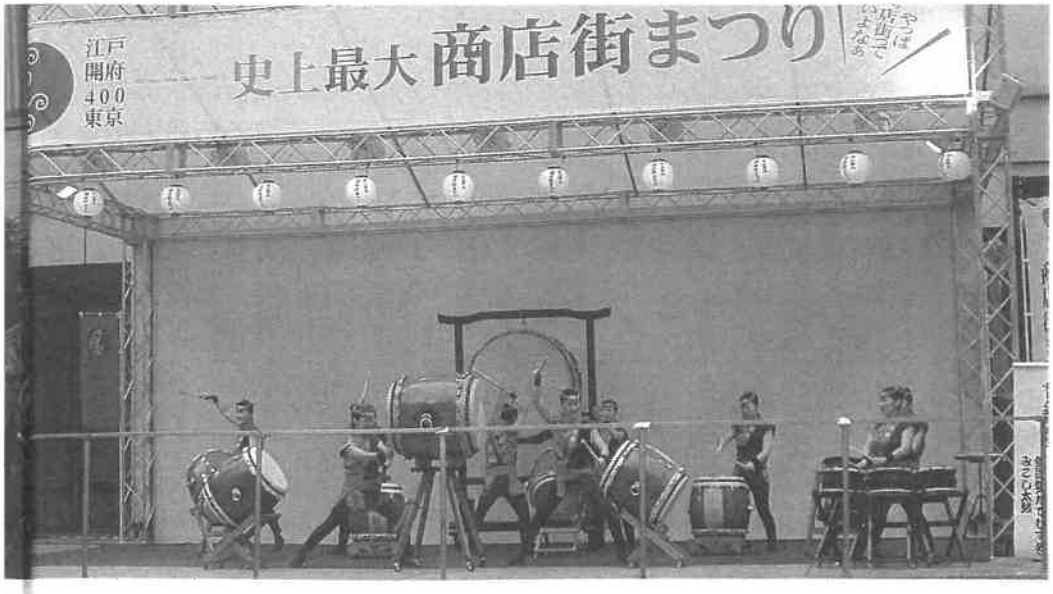
本業のかたわら、太鼓業が本格化してきたのもこの頃である。好景気が影響して、イベントなどが盛んになり、仕事の増えた太鼓事務所から次々と太鼓演奏の依頼が舞い込んできたのである。ここでは、会社という集団だからこその機動力が発揮された。

都内では、たとえば、大手企業の新年会や夏祭り、設立記念パーティーなどの一流ホテルでのイベントや、都市対抗野球の応援合戦、国技館での披露、そしてテレビ関係の出演などさまざまであった。

地方では、関東はもとより、北は仙台、福島、金沢、輪島、南は京都、三重、愛媛、九州まで、地元あげての夏祭りや秋祭り、町おこしのイベントなどに参加。そしてついには、デパートのオープンセレモニーのために香港

へ、また、ロサンゼルス、ハワイまでも行くことになったのである。

なかでもハワイでの演奏では、生涯心に残る出会いをいただくことになる。



「史上最大商店街まつり」に参加（都庁にて）

共通の感動

一九九二年八月、東本願寺主催の世界同朋大会。全国各地から集まったご門徒の方々と共に、ロサンゼルス、ハワイと周り、そこで和太鼓を披露することになった。

各所でお会いしたのは、ご自分のご両親が、日本を離れ海を渡り、その地を生きる場所とされた、所謂、日系二世の方々だった。英語と日本語を混ぜながら、ご両親の出身地の話や、苦労話などをたくさん聞かせてくださった。

太鼓演奏の後は、皺の刻まれた顔に、満面の笑みと、涙を浮かべて「アリガトウ」「サンキュウね」と手を握って下さった。日本の地を一度も踏んだことがない方々もいらした。それでも日本の太鼓の音は、懐しいのだそうだ。

盆踊りがとても盛んで、現在の日本での盆踊りには失せている仏教色が強く感じられた。盆太鼓に合わせて皆で輪になり踊った。海を渡ったその地では、日本の文化が脈々と続いていた。遠い親戚にでも会っているような親近感は不思議な感じだった。生きてきた場所も時間も違うけれども、和太鼓の響きを共有し、一つの感動が生まれたように感じる。喜んでいただけることが、とても嬉しかった。

十三年経った今でもあの笑顔は昨日のことのように思い出せる。遊びに行ったり、電話をしたり、お付き合いは続いている。

どっちが本業かの勢いで、数え切れないほどの演奏の場を得てきたが、そこでの出会いや経験は、私たちにたくさんのことを教えてくれた。華やかな表舞台を支える主催者側や裏方と接するのは、目新しく楽しかった。

いろいろな企業の経営者の方々の発想や苦労話をお聞きできるのは、とても刺激になった。地方の有力者や公共団体の方々の、地域への思いや地方の様々な話は、皆、面白くて勉強になった。

オレンジボードと聞くと「太鼓のね」という反応が返ってくる。西荻窪近辺の夏祭りや盆踊りにはいつも声がかかった。図らずも、会社のPR活動に一役買っていたのは確かであろう。和太鼓は、西荻窪では決して老舗ではなかったオレンジボードにとって、地元に浸透していくための起爆剤だったとも思える。

苦難のとき

しかし、この好景気は長くは続かなかった。バブル時代の崩壊である。長い景気の低迷でイベントや祭り自体が削られる傾向にあり、太鼓の依頼はどんどん減り続けていった。そ

れどころか、本業の不動産取引が激減し、会社の経営は窮地に立たされる。この不況は、長期に渡って続いた。ついこの間の華やかさとは打って変わって、厳しい状況に置かれていった。駅前にあった本店を撤退するにまで追い込まれた。

企業の夏祭りに招かれて

幸いに、太鼓収納庫と練習場を備えた支店は残り、買い込んだ太鼓たちは、不動産のように値崩れを起こすわけでもなく、社内に鎮座し続けることができ、今日に至っている。会社が生き延びてこられた由縁も、ここにありかしらと思えたりするのである。

当時は、本業の先行き不安な中で、太鼓をやり続ける気力を失い、心に余裕がなくなりつつあった。しかし、例年続けてきた地元の夏祭りや小中学校の総合学習、老人ホームなどからは定期的に演奏の依頼がいただけた。そして、そこにはいつも、新しい出会いがあり、溢れる笑顔があった。

太鼓の効用

ままならぬ仕事の中、太鼓でのこうした出会いには癒された。日々の緊張やストレスへの特効薬になっていたように思う。よい気分転換にもなった。集中してリズムを刻むとき、思考停止状態になれて、固くなってしまった頭や心へのマッサージ効果があったように思う。

また、何より言えるのは、一人ではなかったということだ。共に叩く社員がいたからこそ、叩き手の抜けた会社を守ってくれる社員がいたからこそ、やり続けることができた。一打一打の響きに大事な役割があり、それが相まってひとつの曲が完成される組太鼓同様、会社というものは、一人一人それぞれの役割を果たし、心ひとつにして成り立つものだと思う。実務においても、太鼓においても、個を尊重しつつ和を大切にすること、支えあう絆と信頼関係を深く結ぶことを大切にしたいと思う。

後に続く者たちへ

毎年の新入社員へ向けての会社説明会では、「当社は、不動産取引が主体ですが、和太鼓が必修です」と伝えている。興味がある人がやるのではなく、まずは皆が撥を握る。最初は面白そうと入社しても、いざやってみると戸惑うものもいる。しかし、戸惑い大歓迎である。やらねばならぬことに一心不乱に向き合うことが大事だと思う。そして、それがなかなか出来ず、悩み、考え、迷うことが、自分を知るきっかけにもなるであろう。仕事にせよ太鼓にせよ、壁にぶつかったときこそがチャンスである。安心して悩めばいい。

仕事も太鼓も、自分磨きの仕事業であると思う。そんなつもりで、思いがけず出会えた和太鼓を面白がって欲しい。やり続けて欲しい。新しい自分と出会うためにも。